

古（いにしえ）の散歩道

食べ歩きなどして散歩して、昭和30年ころのそば屋とかうなぎ屋など、古風な作りの店のことを思い浮かべると、中庭が古風な日本庭園になっていて、座敷と庭先の堺に縁側があり、引き戸は空けっぱなしになっている。その如何にも使い古した趣のある縁側、それにもまして古めかしい扇風機が無造作に置いてある。その扇風機の風が庭先を通る風に紛れて、その場にとけこんでいる。座敷の畳敷きの上に涼しげで薄っぺらい座布団が無造作に置かれている。

夏ともなれば、蚊取り線香の香りと白い煙が退屈さを紛らわせてくれ風情がある。また、商店街の大売り出しなどの宣伝が書かれた団扇（うちわ）が見渡すと置いてある。これもまた風情がある。

年配の仲居さんが愛想よく威厳をもった口調で注文を取りに来る。周りには年配のお客さんの古風で物静かな、流暢でゆっくりしたテンポの話し声が自然に聞こえてくる。又、池の水の流れる音や、鯉がはねた水しぶきの音、風鈴が鳴り響き、蟬の声など話しの間をとってくれる。蚊の飛ぶ音もまた楽し。

その頃、井にはいった焼きたての鰻を運んでくる。愛想良く無造作に水や空気が流れるごとく自然で何ら違和感を感じさせない。お客さんも、運んでくる人も料理も自然現象の一部であるかのように……………。

今から思えば、優しさあふれる空間であったかのように感じられます。人や古めかしいお客、お芝居など見せてくれる劇場、そしてこれらすべてが自然の中にとけこんでいる。

また町並みには、色々な屋台もあり、そこには遠慮も策略もなく純粋に自慢話や、お酒など飲みたい放題飲んで酔っ払い、自分の世界に浸ったり、またその屋台の住人になったり、眠ったり、ありとあらゆる所に下町の庶民の人情味あふれる風情が感じられました。

夜になると、支那そばの笛の音が聞こえ、何となく外に出て行くと、仲間が同じように出てくる。支那そばを注文し街並みを見ながら食べる。その笛の音が何となく物寂しく感じられる。

又、金魚や風鈴などもリヤカーで売りに来る。野菜や果物も売りに来る。毬に入った栗などが目に付くと何となく秋の気配を感じ物寂しさが漂うこともある。街角でお爺さんやお婆さんが話している方言を聞くと何と優しく上品な言葉だろうと思いました。きっと、人柄がよく優しい人が多かったのでしょう。

古（いにしえ）の道を散歩し、唯一人、山頂や草原に立っている。風の音を聞き鳥の声や飛ぶ音を聞き、また木の葉や枝が騒ぎ、その中にいて静寂であり、心は無となる。風もなく生き物の気配を感じられない。これは神秘である。

繁華街のざわめきの中において、静寂を感じる時がある。ただそこにあるものは、緩やかな空気の流れだけ。

夜も更け、繁華街の人のざわめきは消え、本当の静寂さがやってくる。そこにはざわめきの気配の余韻が残り、やがて原始時代の地球に戻る。静寂とは雑音や騒音のなかに、その中にも在る。全ての動きが一瞬止まるときがある。別の世界へ行ったのかもしれない。

行ったり来たり空間を旅し、心の旅の楽しさに浸る。

夏になれば太陽の光に力強さを感じ、燦々と輝く太陽の色が暖色の空気の如く暖かい。これもまた生命の起源とも言うべき、人類や生命が存在し得なかった時代を思い浮かべることができる。

蟬の鳴き仕切る声が山林や木々を覆うとき、少年時代の無限で幻想的な世界に浸る。

小川の流れ、きらきら光る太陽の光が美しい。この光景に何処かで出会ったような気がする。子供たちがその景色の中で楽しそうに遊んでいる。

小川に住む生き物が活動を始めた。小川を遡ればずっと昔の場面に出会うかもしれない。

畦道（あぜみち）にはリヤカーが置かれている。ゆっくりと自転車が横切っていく。畑仕事をしている人も、この光景を生き生きとさせてくれる。

太陽が真上に昇り、昼ともなれば楽しそうな話し声が聞こえてくる。遥か昔、何処かで出会った景色かもしれない。そして、その景色の中にいる。

(H6.4～)